【vol.27】インターバルについて詳しく　～その 1～

こんにちは、大沼です。

ここ 2 回ほど、楽曲の key(キー)について解説していましたね。

これまで学んだ key の基本概念をまとめると、

・key とはその楽曲の基準となる 1 音(トーナルセンター)と、音階(スケール)を表したものである。

**・メジャーキーの場合は、そのトーナルセンターをトニックとしたメジャースケール、
マイナーキーの場合は、そのトーナルセンターをトニックとしたナチュラルマイナースケール、
がそれぞれ基準となるスケールになる。**

・楽曲はその key に対応したスケール(の構成音)で大半が構築されている。

と、この 3 つでした。

基本的な捉え方としては、上記 3 つのポイントだけで、
key そのものの意味としては十分です。

この key の概念を基本にして、その上で、今まで学んできたスケール、コードの知識を
組み合わせることにより、楽曲の分析の方法や、アドリブ、作曲、アレンジなどの
手法を考えて行けるようになります。

それと、key の意味していることとして、ひとまず上の 3 つからは
はずしておいたんですが、key にはメジャーとマイナーがありますよね？

前の解説では、ざっくりと、

・メジャーキーは明るい雰囲気(音楽的な響き、感じ)のキー
・マイナーキーは暗い雰囲気(音楽的な響き、感じ)のキー

と説明していたと思います。

これはこれで正しいんですが、音楽理論の解説としては

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

ちょっと言葉が足り無すぎたりもします。

この辺りのちゃんとした説明は、もう少し後でやりますので、今は、

メジャーキー＝明るい、マイナーキー＝暗い

の捉え方で OK です。

まあ、正確な解説といっても、基本的な音楽理論は、

『(先に音、音楽があって)それを聴くと、大多数の人はこう感じますよ』

ということを、後付けでまとめたものなので、メジャー＝明るい、
マイナー＝暗い、でも、とりあえずは大丈夫なのですが。

さて、key の基礎について一段落したところで、今回は、タイトルの通り、
『インターバル(interval)』について詳しくやっていきましょう。

ここを理解していると、上級者が、

・なぜコードネームを見ただけでそのコードが押さえられるのか？

・なぜオリジナルのコードフォームを作れるのか？

・なぜ各スケールの違いがわかるのか？

・なぜアドリブなどで、その時鳴らして良い音とダメな音がわかるのか？

と、そういったことが理解できます。

インターバルについては vol.18 でも少し解説しましたが、
今回はその内容を詳しく学び直します。

もしかしたら、今回のテキストを見て、

「こんなに覚えなきゃならないのかよ・・！」

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

と、思うかもしれません。

というか、最近の、スケールやら key やらコードやらの内容で、
とっくにそう感じているかも知れませんが。笑

僕自身も学生の頃、新しいことを覚えれば覚えるほど、
やらなきゃならない事が次々と見えてきて、唖然とした記憶があります。

でも、続けていたら、いつの間にか頭に入っていました。

いつも言っていることですが、焦らずひとつずついきましょう。

必ず、「あの時頑張ってよかった」と思うときが来ますので。

ではやっていきましょう。

まず、**『インターバルとは何なのか？』**についてなんですが、これは、

『とある音と音の距離(どれだけ離れているのか？)を数字(とアルファベット)で表したもの』

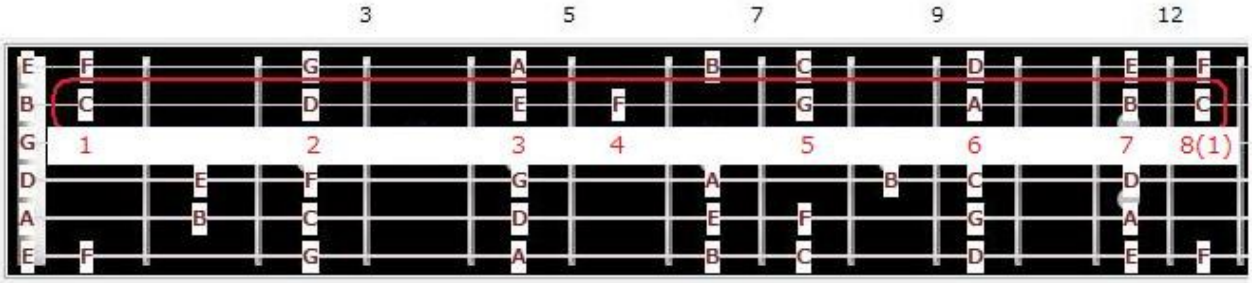
でしたね。

そもそも英単語としての「interval」の意味は、「間隔」や「合間」なので、
その単語を音楽では、「音と音の距離(間隔)」としているワケです。

vol.18 では、C メジャースケールを例に、インターバルの基本的な考え方を学びました。

その時の図をもう一度見てみましょう。

図、2 弦上で見る、C メジャースケールとインターバル



Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

見ての通り、ダイアトニックスケール(7 音構成のスケール)である、
C メジャースケールの各構成音に、1～7 までの数字を振っていますね。

トニックである C 音の”1 オクターブ上の C 音”まできたら、
その C 音は 8 番目の音とも言えるし、また 1 番目に戻った、とも言えます。

これはどちらでも捉えられるようにしてください。

さて、おそらくあなたは、今まで使ってきたスコアやコード表などで、
「♯9」とか、「♭5」といった表記を見たことがあるかと思います。

正直なところ、結構な頻度で出てくるはずですが、
理論を学んでいない人の場合、そう書かれていても、
さっぱり意味がわからないでしょう。

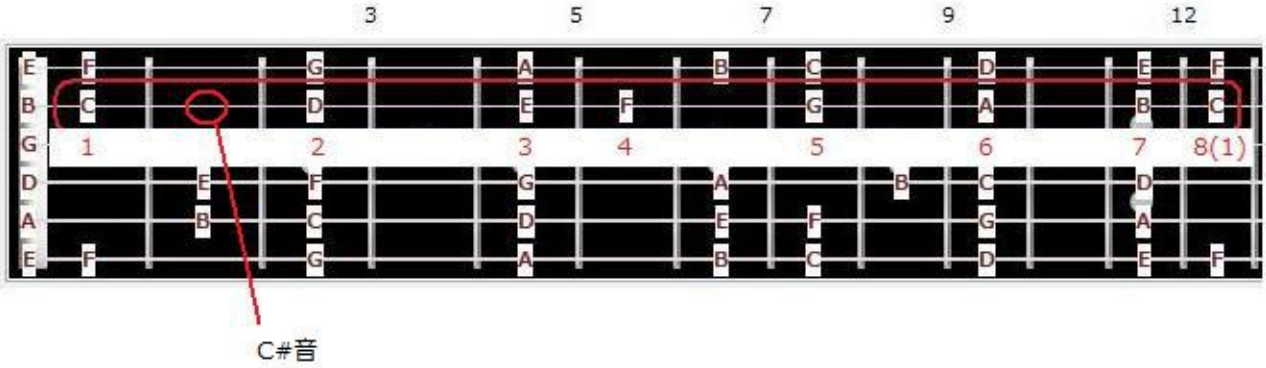
今回はその辺りの詳しい解説ですね。

基本的には単純な事ですので。

ではまず、そもそもとして、「♯」は、その記号が付いている音を半音上げる表記ですね。

「C♯」だったら、C 音を半音上げる、ということです。

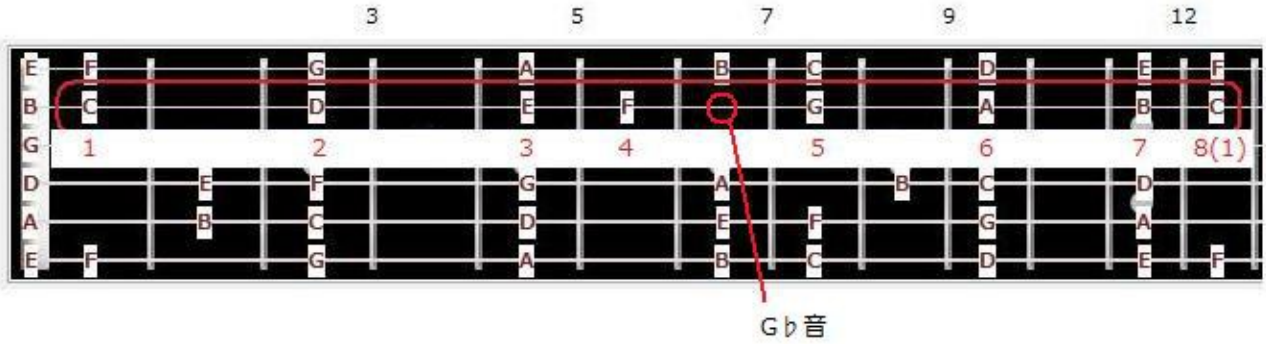
さっきの図なら、2 弦 1 フレット C 音の半音上の音になりますね。



逆に、「♭」は、その記号が付いている音を、半音下げる事を示しています。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

例えば「G♭」ならば、先ほどと同じ図で言うと、2 弦 7 フレットの音になるわけです。



と、これらの♯と♭の基本的な意味を再確認したところで、
インターバルの数字の話に戻りましょう。

今回も例に挙がっているのは、皆さんおなじみ、
最も構成を理解しやすいであろう、C メジャースケールですね。

vol.18 で学んだ、C メジャースケールの各構成音に、
インターバル的な数字の呼び方をつけるとこうでした。

まず、CDEFGAB の順に 1234567 です。

そうして次に、音楽用語としての、1234567 の各数字の
本来の呼び方はこのようになっていましたね。

※C メジャースケールの場合
1、C 音→『トニック』、『1st(ファースト)』(コードの場合は root とも呼ぶ)
2、D 音→『2nd(セカンド)』
3、E 音→『3rd(サード)』
4、F 音→『4th(フォース)』
5、G 音→『5th(フィフス)』
6、A 音→『6th(シックス)』
7、B 音→『7th(セブンス)』
※8、C 音→『オクターブ(or トニック or 1st)』

見ての通りで、数字の呼び方は英語のそれですね。

じゃあ先ほど出てきた様な『♭5』などの表記。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

これをどう捉えたらよいのか？

先ほど「♯は半音上げる」「♭は半音下げる」とお話ししましたね。

色々と説明してきましたが、ここまでの内容を全て理解できているならば、
きっとあなたはこの質問に答えられるはずです。

『C メジャースケールのトニックである C 音から見て、「♭5」にあたる音名を答えよ』

と。

C メジャースケールのトニックは C 音。

C メジャースケールの 5 番目の音は G 音。

C 音から見て 5 番目の音である G 音は 5th と呼ぶ。

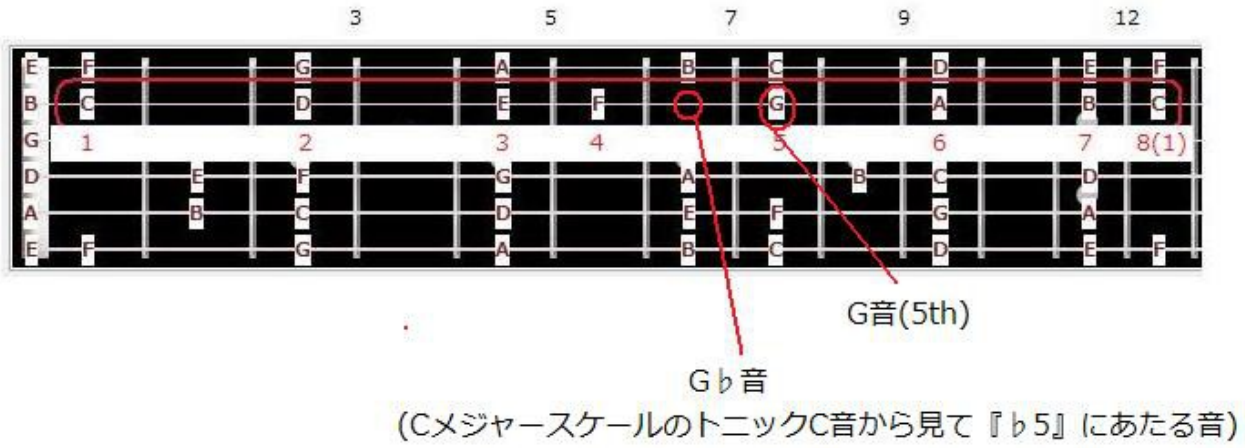
「♭」の表記はその音を半音下げるということ。

ならばトニックである C 音から見た『♭5』とは・・・。

と、こういうことです。

もうわかりますよね？

C メジャースケールのトニックである C 音から見て、「♭5」にあたる音は「G ♭音」です。

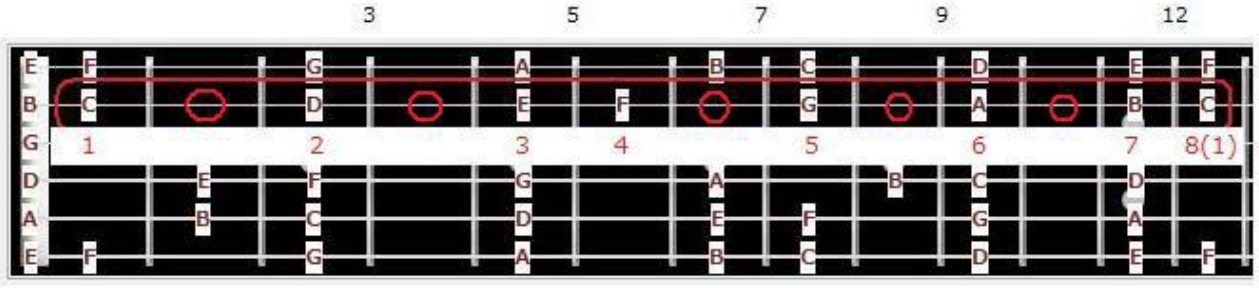


Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

このように「♭」とか「♯」などの一見わかりにくい表記も、
こういった基本のインターバルから半音上下させただけのものです。

と、ここまでが前置きなんですが(長かったですね笑)、
もう一度、今回のサンプルである、2 弦上の C メジャースケールの図を見てみましょう。

C メジャースケールの構成音の 7 音の左右には、大方、1フレット分のスキマがありますね。



赤丸の部分がスキマ

C メジャースケールの構成音を基準として、1234567 の番号を振った場合、
♯や♭がつく音は、さっきの「♭5」の例のように、大体、この赤丸の場所の音になりますよね？

C 音がトニックのスケールの「♯5」にあたる音と言ったら、2 弦 9 フレットの G♯音になるわけです。

と、言うことで、これらの概念を踏まえた上で、
今回の本題、**『インターバルの正式な呼び方』**を学んでいきましょう。

具体的には、さっき復習した vol.18 の、

※C メジャースケールの場合
1、C 音→『トニック』、『1st(ファースト)』(コードの場合は root とも呼ぶ)
2、D 音→『2nd(セカンド)』
3、E 音→『3rd(サード)』
4、F 音→『4th(フォース)』
5、G 音→『5th(フィフス)』
6、A 音→『6th(シックス)』
7、B 音→『7th(セブンス)』
※8、C 音→『オクターブ(or トニック or1st)』

↑これの正確な呼び方を覚える、と言う事になります。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

インターバルには、1～7(8)までの通常のものと、さらにその上のテンション(9th、11th、13th 等)がありますが、今回は 1～7(8)までの数え方、テンションは次回、と 2 回に分けます。

量が多いとワケがわからなくなりますからね。

いつもの事ですが、**相変わらず C メジャースケールを例にしていることは、**
常に頭において置いてください。

音楽理論的にもメジャースケールは全ての基準であり、
なにを解説するにしても、最も理解しやすいものです。

ではいきましょう。

まず、C メジャースケールの 1 番目、C 音ですが、これは変わりません。

スケールやコードの基準となる第 1 音として、
スケールならば『トニック』もしくは『1st』です。

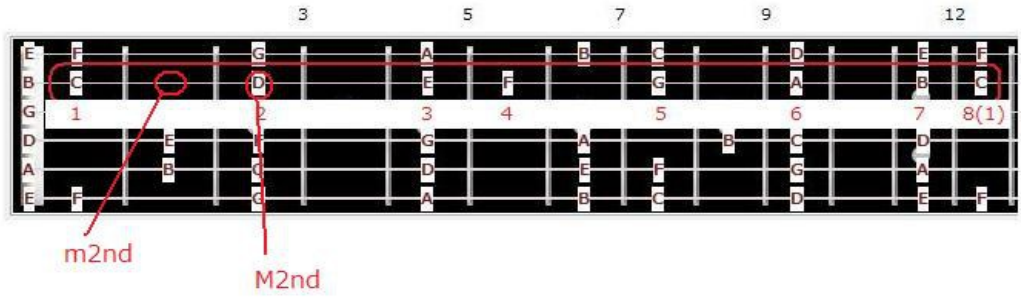
※コードならば『ルート』(もしくは 1st と見ても問題なし)

次に第 2 音、(C メジャースケールなら D 音)

これは、2 種類あります。

トニックの半音上の音が『m2nd(マイナーセカンド)』
トニックの全音上(1 音上)の音が『M2nd(メジャーセカンド)』

と、インターバル的にはこのように呼びます。



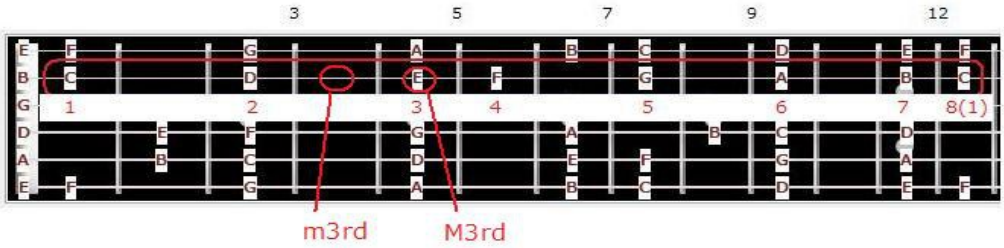
次に第 3 音。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

これも 2 種類。

トニックの 1.5 音上(3 フレット上)の音が『m3nd(マイナーサード)』
トニックの 2 全音(4 フレット上)の音が『M3nd(メジャーサード)』

これは以前、2 種類の 3rd の把握でやったので、理解しやすいかと思います。

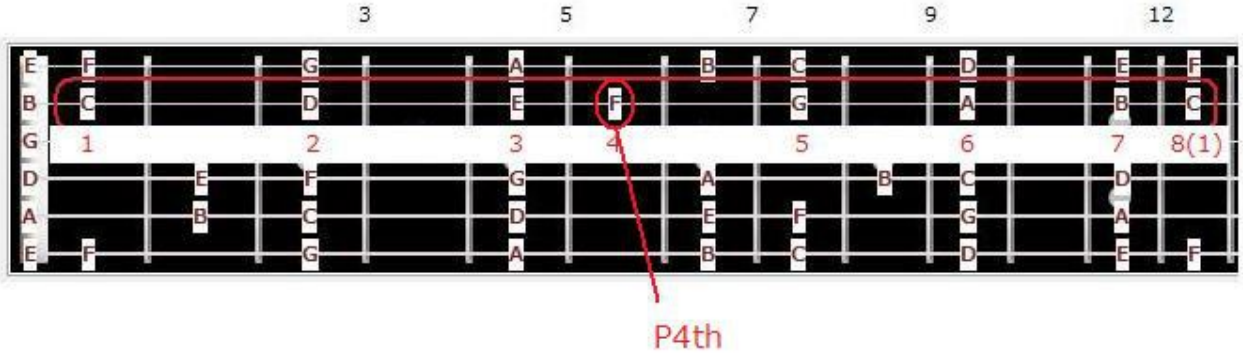


次の第 4 音。

この第 4 音はテンションとしては 11th にあたる音です。
(※意味がわからなかったら vol.18 を復習してください)

テンションである 11th として見る時は 2 種類を頻繁に見ますが、
第 4 音として見る時は、(一定以上、複雑な音楽でなければ)大方、1 種類だけです。

トニックの 2.5 全音上(5 フレット上)の音が『P4th(パーフェクトフォース)』



さて、新しい用語として、『パーフェクト～』というものが出てきましたね。

これについてざっくり説明すると、トニックの音とその音の音波の周波数比率を対比した時、
特に単純な数字になる(1:1、1:2、2:3、3:4 など)ものに『パーフェクト(P)』の文字がつきます。

まあ、普通に音楽を楽しむ分には、呼び方さえわかっていれば、
この辺りの理由は別に覚えていなくても構いません。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

ただ、もう少しだけ説明すると、2 つの音の音波の周波数比が整っていれば整っているほど、
その 2 音を同時に鳴らしたとき、綺麗に響くよね、ってことです。

逆に、2 つの音波の周波数が整っていなければ整っていないほど、
その 2 音を同時に鳴らすと、綺麗に響かない、となるわけです。
(※と、西洋音楽では考えられてきたようです)

だから『パーフェクト』。この程度の解釈で十分ですので。

(※ちなみに 1 度(1st)も、全く同じ音程の 2 つの音の距離(例えば同じ高さの C と C)を、
『完全 1 度(P1st)』の音程と呼びます。ですがこれについては『ユニゾン』の呼び方の方が
馴染みがあるかもしれませんね)

では、次にいきましょう。

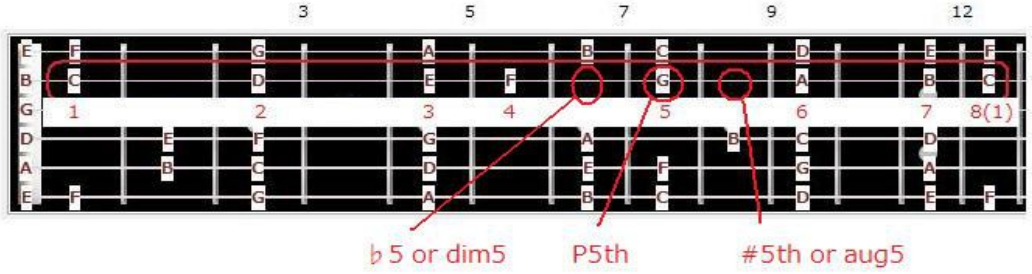
第 5 音。これは 3 種類が良く出てきます。

まずは基準の『P5th(パーフェクトフィフス)』。
トニックの 3.5 全音上(7 フレット上)の音です。

そしてその左右(音程的には上下)に、『♭5』と『♯5』。

『♭5』の事を、もう 1 つの呼び方(捉え方)として『dim5th(ディミニッシュドフィフス)』
『♯5』の事を、もう 1 つの呼び方(捉え方)として『aug5th(オーギュメテッドフィフス)』

どちらかと言えば、♭5、♯5 の方が略称ですね。



コード表記としては、例えば『Cdim(C ディミニッシュ)』や
『Caug(C オーギュメント)』というモノがありますよね。

これは、本来の C のトライアド、C、E、G の P5th である、G 音を半音動かしたコードになります。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

なので『Cdim』のコードならば構成音は C、E、G ♭、
『Caug』のコードならば、構成音は C、E、G♯となります。

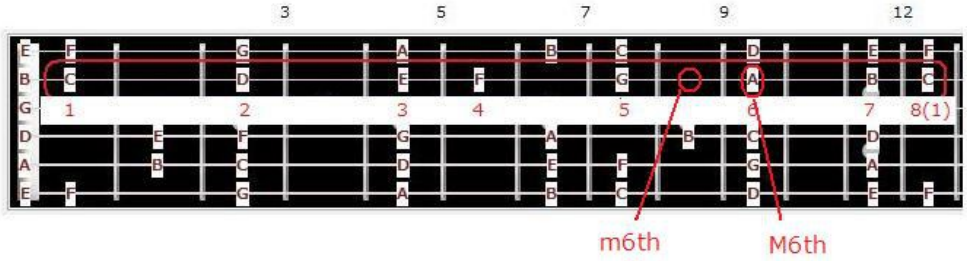
(※実は 4th にも aug と dim の音程がありますが、そこまで出てこないと思うので、
それについては頭の片隅にでも置いといて下さい)

第 6 音にいきましょう。

第 6 音は 2 種類。

トニックの 4 全音上(8 フレット上)の音が『m6th(マイナーシックス)』
トニックの 4.5 全音上(9 フレット上)の音が『M6th(メジャーシックス)』

となります。



さて、ここで湧き上がるであろう疑問として、
『♯5(aug5th)と m6th って同じ音じゃね？』ということがあると思います。

これについては、『5th 側から見るか、6th 側から見るか』によって
同じ音でも捉え方が変わるんですね。

この内容は、どちらかというとスケールとコードに関係した話になるので、
とりあえず今は、両方の見方で捉えられるようにしておいてください。

最後に第 7 音。

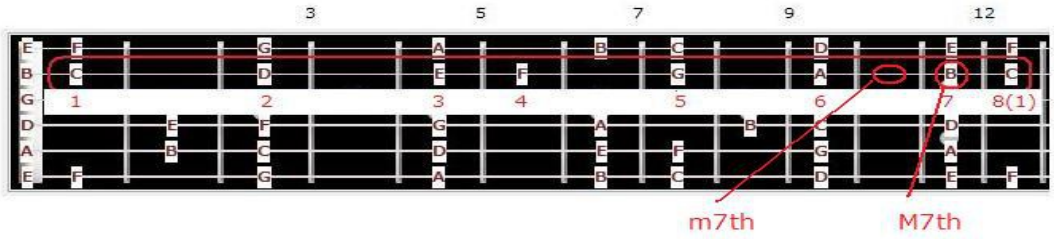
これも 2 種類です。

トニックの 5 全音上(10 フレット上)の音を、
『m7th(マイナーセブンス)、もしくは♭7th(フラットセブンス)』

トニックの 5.5 全音上(11 フレット上)の音を『M7th(メジャーセブンス)』

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

と、呼びます。



これについては、今知っている 7th コードを確認してみるとよくわかると思います。

例えば CM7 ならば M7th である B 音が、Cm7 もしくは C7 等であれば、
m7th である B ♭音が含まれているはずです。

この辺り、高い音になればなるほど、『トニックから何音下か？』で数えた方が
見やすくなってきたりもしますが。
(※M7th はトニックの半音下、m7th は全音下の音、の様な感じで)

さて、結構なボリュームになりましたが、今回は以上です。

これらの、インターバル把握の練習法としては、まずやる事として、
今回やったような『1 本の弦の上で確認する』と言うのが基本でしょう。

要するに、トニックの場所(音)を決めて、1 音ずつ、音名とインターバル名を言いながら
弾いていきます。

C トニックで見るならば、

『C、トニック、D ♭、マイナーセカンド、D、メジャーセカンド・・・」

と言ったような感じで。

一見バカみたいに思えるかも知れませんが、
この練習が一番効きます。笑

ある程度、継続してやってみてくださいね。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

で、この 1 本弦上での確認を「横の確認」とするならば、次に行うのは「縦」の確認です。

適当なトニックとスケールポジションを選び(最初は C メジャースケール推奨)、
同じように音名とインターバル名を確認しながら、1 音ずつ弾いていく、と。

この辺りを理解しておくと、チャーモードの各ダイアトニックスケールの意味(と言うか構造)だったり、B7(♭9, ♭13)のような、複雑なコードネームが表している事の意味がわかるようになってきます。

引き続き、詳しくやっていきますが、それらをしっかりと理解する為の基礎知識として、
今回のインターバルの把握が必須です。

頑張っていきましょう。

では、また次回。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved